

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02382

研究課題名（和文）『和漢朗詠集』古筆切の研究

研究課題名（英文）A study of old handwritten fragments of "Wakan Roeishu"

研究代表者

恵阪 友紀子 (Esaka, Yukiko)

京都精華大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：90709099

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：『和漢朗詠集』の伝本については本文異同が大きく、諸本の系統が整理されていないが、本文異同の要因としては、伝本の多さに加えて、正確に書き写すという意識が低かったことにあると考えられる。書体の類似などの単純な誤写だけではなく、積極的な本文の改変や詩歌の増補を行ったと考えられる例が散見する。『和漢朗詠集』は、四季・雑の大きな分類の下に、細目を立てて詩歌を分類することなどから、作詩・作歌の手引きとしての役割を果たしていたとの指摘があるが、そのような性格から、完成された作品としてただ書き写すのではなく、書写者がそれぞれの目的に合わせて改変しながら享受されてきたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『和漢朗詠集』は、平安時代に書写された完本が複数あり、本文の状況としては恵まれているため、後世の写本については「朗詠江注」などの注釈については検討されているものの、本文そのものについてはあまり注目されてこなかった。写本は忠実に写されるものと考えがちであるが、豊富な写本が伝わる『和漢朗詠集』の諸本を検討すると、書写の方法や和歌の用字などさまざまな工夫が凝らされ、ただ書き写すだけではなく、書写者それぞれの目的に合わせた写本が作られていた様子が読み取れる。作品が書写され、受け継がれていく享受のあり方の一端を示した。

研究成果の概要（英文）： The contents of "Wakan Roeishu" may differ depending on the book from which it was transcribed. The reason is thought to be that there was a low level of awareness to copy accurately. There are many examples of not only misspelling but also intentional alterations.

The "Wakan Roeishu" was not copied verbatim as a completed work, but was passed down through the generations, being rewritten according to its intended use.

研究分野：人文学

キーワード：和漢朗詠集 書誌学 本文享受 古典籍

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平安時代中期に編纂された『和漢朗詠集』は、編纂以後、広く親しまれ、後世の和歌や物語をはじめ、謡曲などにも大きな影響を与えてきた。数多くの伝本が現在まで伝わることも、本集がよく読まれてきたことを裏付けているが、それだけに本文の異同も多い。

後世の作品への影響も大きな作品であるからこそ、どのように本文が受け継がれてきたのかを明らかにすることは、本作品の享受だけでなく、周辺作品の研究にも欠かせないものである。しかし、伝本の多さもあって、平安時代書写本や、上下巻を完備した伝本など、個々の写本についてはある程度の研究が行われているが、裁断され、断簡(古筆切)についてはまとまった研究がなされていない状態であった。

このため、本研究では、『和漢朗詠集』の古筆切を通して、その本文享受の在り方を明らかにしようと考えていた。

2. 研究の目的

『和漢朗詠集』は、初の勅撰和歌集として編纂された『古今和歌集』に匹敵する伝本が現存することからも、その影響力の大きさがうかがい知ることができるが、伝本の多さ故、どのように享受されてきたのかは十分に明らかにされていない。本研究では、平安時代に書写された古筆切に注目し、その調査を通して平安期の『和漢朗詠集』の本文を明らかにすることを第一に目的とした。また、鎌倉期以後に書写された伝本では、平安書写の伝本にはない詩歌が増補されていたり、本文改訂がなされたりしていることが多いことから、平安期写本と鎌倉期以後の写本を比較することで、『和漢朗詠集』の本文享受の実態を解き明かすことを第二の目的とした。

3. 研究の方法

平安時代から鎌倉時代ごろまでに書写された古筆切を可能な限り収集・閲覧し、本文の整理と本文異同等の分析を通して本文系統を考察する。平安期と鎌倉期以後の本文を比較することで、成立時とその後、享受されていく過程でどのように変わっていくのかを分析する。合わせて、書籍の形態、界線・注記などの書写形式についてもその意義を考察する。

4. 研究成果

平安時代に書写された写本のうち、平安期から鎌倉・室町期にかけて書写された古筆切や写本の資料を収集し分析した。

(1) 本文系統と書写態度

『和漢朗詠集』は、平安時代に書写された完本だけでも複数現存し、本文の状況としては恵まれている。そのためかえって、後世の写本については、「朗詠江注」などの注釈については検討されているものの、本文そのものについてはあまり注目されてこなかった。

本文の系統については、粘葉本とその同筆の近衛本などの系統と、関戸本・雲紙本の系統が対立し、その他、両系統の特徴を併せ持つ伝本などがあることは明らかにされていたが、伝本の多さもあり、本文系統については十分な検討がなされていなかった。

古筆切も含めた本文を検討すると、伝本の多さに加え、正確に書き写すという意識が低かった点が系統を複雑にする大きな要因であることが明らかになった。漢詩については、書体の類似などの単純な誤写も多く、和歌については、「今日のみと」「今日とのみ」のような、意味は大きくは変わらないような些細な異同が多数見られる。

誤写や些細な異同については、本集が調度品や書の手本、文字の鑑賞として書写された点が考えられる。『和漢朗詠集』は、漢詩と和歌を併載することから、漢字とかなのバランスが良く、装飾料紙を用いた写本も多く、内容よりも見た目に重点が置かれた結果、本文の書き誤りには注意が払われなかったと思われる例も多く見られる。

一方、鎌倉記以後の写本については、漢詩を中心に本文異同や詩句にまつわる注記、語句の説明など、大江匡房の注である「朗詠江注」をはじめとした注釈が加えられた伝本も多く存在する。このような写本では、漢詩句は本文異同や注記が詳細に記されるが、和歌の場合、明らかな誤写があっても訂正されないなど、扱いに差がみられることがある。

誤写だけでなく、詩歌の増補など、積極的な本文改変が行なわれた例も散見するなど、『和漢朗詠集』は完成された作品として忠実に写されたのではなく、書写者がそれぞれの目的に合わせて工夫しながら受け継いできたという享受の様相が確認できた。

(2) 和歌と漢詩の書写形式・伝本の形態

平安期書写と鎌倉期以後の写本では、和歌の書写形式が異なっている。平安期書写のものは、漢詩一行と和歌一行(一首は二行分)がほぼ同じ幅に書写されているが、平安末期から鎌倉にかけての写本では、徐々に和歌の書写幅が狭くなり、大半の伝本では、和歌一首二行を漢詩一行の幅に詰めて書かれるようになる。

(1)に述べた通り、漢詩は書写された後に本文の訂正や異同の注記が書き込まれる例が多いが、和歌については、明らかに字数が不足している場合でも修正されない場合が少なくない。書写年代が下るにつれ、和歌よりも漢詩が重視される傾向が読み取れる。

和歌は意味が大きくは変わらない些細な本文異同が多いと述べたが、和歌の異同は、初句の異同が少なく、第二句以降に多く見られた。『和漢朗詠集』に収載されるものは朗詠に適した詩歌、つまり、その当時よく知られたものである。和歌を書写する際、忠実に写すのではなく、初句を見てどの和歌かを理解し、書写者が暗記している形で書き記したために、第二句以降に異同が多く生じることになったのではないかと考える。このような和歌と漢詩に対する意識の差が、書写態度から読み取れる。

ところで、『和漢朗詠集』は鎌倉期以後の写本でも、卷子本あるいは元卷子本であったものが多く見られる。平安書写の卷子本は装飾料紙を用いたものが多いが、鎌倉期以後の写本では素紙を用いたものが多い。

卷子本に仕立てられたものは、天皇に奏覧する本や調度品のほか、仏典や漢籍などである。『和漢朗詠集』は和歌・漢詩を併載するが、本文の形態、書写形式、書写態度、本文異同の状態などから、漢籍の扱いであったと考えられる。

(3) 本文の用字

漢詩も和歌もただ書き写すだけでなく、書体や用字にも工夫が凝らされている。

漢詩の場合、楷書・行書を取り混ぜて変化を付けているものも多い。また、書写年代が下ったものでは篆書体なども取り入れられている。和歌は、ひらがなや草仮名のほか、万葉仮名や宣命書き風に書写されるものも見られる。

このような書体の変化は、装飾料紙を用いた調度品以外でも見られる。「久しく」を「久卅六」(「しく」を「四九」の掛け算で「三十六」と戯れ書きにしたり、「おもひやる」を「想像」と訓読語を用いたりする例がある。訓読語を知らなければ読むことが困難である。このような用字が可能であるのは、『和漢朗詠集』が広く知られた歌を収載しているからであり、知っているから読めたと思われる。あえてこのような用字にするのは、漢文訓読の練習であった可能性も考えられる。

以上、書写態度、書写形式、写本の形態から『和漢朗詠集』は、さまざまな工夫が凝らされ、ただ書き写すだけでなく、書写者それぞれの目的に合わせた写本が作られていく様子を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 恵阪友紀子	4. 巻 104
2. 論文標題 『和漢朗詠集』山井切と朗詠江注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学国文学会『國文學』	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 恵阪友紀子	4. 巻 103
2. 論文標題 『和漢朗詠集』の書写と装丁	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学国文学会『國文學』	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 恵阪友紀子	4. 巻
2. 論文標題 『和漢朗詠集』の書写と享受	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018和漢比較文学検討会論文集	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 恵阪友紀子
2. 発表標題 『和漢朗詠集』の書写と享受
3. 学会等名 和漢比較文学会特別例会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 恵阪友紀子
2. 発表標題 『和漢朗詠集』の享受 書写の形式から
3. 学会等名 和漢比較文学学会例会（西部）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 恵阪友紀子
2. 発表標題 『和漢朗詠集』多賀切の享受
3. 学会等名 和漢比較文学学会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 恵阪友紀子
2. 発表標題 和歌と漢詩の影響関係 『和漢朗詠集』を中心に
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会・第一回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------